

國學院大學學術情報リポジトリ

五井昌久における「靈界」思想の形成

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 尚文, Yoshida, Naofumi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000348

五井昌久における「靈界」思想の形成

吉田尚文

はじめに

本稿は、戦後の新宗教教団・白光真宏会〔1〕の教祖・五井昌久（一九一六—一九八〇）の有する「靈界」思想の形成過程——特に、五井がさまざまな教団を遍歴するなかで、どの教団のどのような教理をいつの時点で取り入れたのか——を考察し明らかにすることを目的とする。

五井は、終戦前後から同教団の前身・五井先生讃仰会が結成された一九五一年までに、複数の教団に入信し、そこにおいて

精神的指導者や心霊関係の著作をとおして、「靈界」にかんずる知識に触れていた。

そこで本稿では、五井の「靈界」思想の特徴を明示したうえで、どの教団あるいは人物、著作から、とりわけ心霊知識を摂取し、みずからの「靈界」思想に反映させたかを明らかにしていきたい。

五井の「靈界」思想は、①「靈界」の構造と性質、②「守護靈、守護神」思想に焦点をあて、各教団との比較分析をおこなう。比較するのは、五井が信仰遍歴した教団等で、具体的には、おおむね接触した順に、世界救世教、生長の家、日本心霊科学

協会（心靈科学研究会）、千鳥会である。特に、上記教団・団体の教祖もしくは精神的指導者（幹部）の心靈知識にかんする教説と五井のそれとを入念に比較検討していくことになるろう。

関連の先行研究²⁾を閲覧するとき、様々な新宗教教団の「靈界」思想にかんして概括的に論じているのは、『新宗教事典』における〈対馬路人「世界観と救済観」〉の項だろう。他の論文・研究ノートでは、出口王仁三郎の『靈界物語』の著述内容を詳細に分析した窪田「二〇一五」があるが、大本から派生した教団群までは言及されていない。日本を含むスピリチュアリズムの歴史を概観した渡辺「二〇〇七」は、同思想のキーマンである浅野和三郎（二八七四—一九三七）、脇長生（一八九〇—一九七八）の経歴等に若干触れている（浅野、脇、両氏については、本稿の後の章で詳述—筆者註）。津城「二〇〇七」は西洋の近代スピリチュアリズムにおける「死後存続説」を論じた。田中「一九六五」には、「幽界」と「顕界」との関係性（「幽界」と「顕界」とは重なり合っている」「両界は重なり合っているが厚さが無いから同じ所で重なり合っている」等）や神道家・本田親徳（一八二二—一八八九）が説いた一八一階級の「神界」説など、日本のスピリチュアリズムに通ずる思想が紹介されている。菅野「二〇一一」は、平田篤胤（一七七六—一八四三）の

著『靈能真柱』における「幽冥論」として、死後靈魂は「顯国」と同国土にある「幽冥」へおもむき、墓上にとどまって子孫を見守る、との世界観について述べ、神道の立場による一つの靈魂観をしめした。

すでに対馬が前掲『新宗教事典』で「靈界思想を強調する教団」として、靈友会、大本とその分派教団、他に真如苑、解脱会、天照皇大神宮教、世界真光文明教団（系）、阿含宗、GLAなど「二三一頁参照」と教団名を挙げている。また、大本が説く「靈界」の世界観（『靈界物語』の内容）、近代スピリチュアリズムの歴史、平田篤胤や本田親徳の靈魂観はすでに先行研究である程度明らかにされてきている。しかし、大本から分派した教団群の「靈界」思想の比較検討、分析の点においてはまだ十分になされているとはいえない。なお、白光真宏会は、大本の分派教団・生長の家から派生した。そして白光真宏会の教祖・五井は大本から派生した教団群のうち複数と接触をもったがゆえに、五井の「靈界」思想のなかに、接触した教団からの影響をさぐることができる。本稿では、影響関係を検討する際、接触した教団（あるいは著作）に注目したい。神道系新宗教のうち白光真宏会の「靈界」思想は、まだ解明されていない面が多い。だからこそ、大本につながりをもつ教団から影響をうけ

た白光真宏会・五井昌久の「靈界」思想とその形成過程を明らかにする意義は大きいといえる。本稿の延長線上には、さらに前の時代の親徳、篤胤までもふくむ、かなりの広がりをもった「靈界」思想の「水脈」にいたる可能性を有している。

本稿では、時代を近世までさかのぼって検討することはしないが、本研究の重要性として、これは白光真宏会一教団の思想研究にとどまらないものであり、近世以降の神道系の靈魂観との関連をみていくならば、さらに研究の拡がりが予想できるのである。

さて、本論文では先に述べたように、白光真宏会の五井昌久がどのようなプロセスを経て、その「靈界」にかんする思想を形成したのかについて明らかにしていく。五井の「靈界」思想の形成過程を文献で示しながら検討し、教祖にインパクトを与えた言説について次章より順次解き明かしていきたいと思う。

一、白光真宏会・五井昌久の「靈界」思想

(※以下、引用文中の旧字は、おおむね新字に筆者が置き換えた。尚、文中「」内の語句は筆者が補ったものである。)

(一) 思想的経緯

五井の自叙伝『天と地をつなぐ者』⁽³⁾によれば、五井は一九四〇年九月に日立製作所亀有工場に入社し「五頁参照」、彼は当時の神観について次のように述べている。

日立に入った頃の私の神観は、神と言う者は自然や人間を創造しただけで、(略)神が外から人間を助けて呉れると言うようなことは考えられなかった。まして死後の靈魂の存在等は頭から考えてもみなかった。従って神を想う場合は、(略)外から救って貰おうとも、貰えるとも思わなかった。〔二二頁〕

このように、五井の二三、二四歳当時は、創造の「神」を認めつつも、自力が基本であり、「神」が他力的に助けてくれたり、死後に「靈魂」が存在するといったことは念頭になかった。また、日立の社員時代、第二次世界大戦中の頃の五井の考え方は、その述懐によると次のようなものだった。

十代の終り頃から二十代の初期に、私は靈媒の女性に二三人〔二、三人〕出会っていたが、靈能とか、死後の靈魂の

存在などは、まるで問題にせず、(略) 私の心が絶対者としての神のみを形なき存在として信じ、形なき生物などあるわけがないと堅く思いこんでいたのである。(略) 死後の個性の存続と言う風に結びつけて考える事は出来なかつた。死が終結であればこそ、日常悔いのない善い生き方をしなければならぬのだ。(略) [一五頁]

戦前の五井は、無形の絶対者としての神を信じる気持ちはあつたが、「死後の靈魂」や「死後の個性の存続」については考えの外であつたようである。こうした考えが、戦後、いくつかの教団を経ていつた結果、明確に「靈界」思想を打ち出すようになっていく。

(二) 五井の「靈界」思想

その特徴を論じるうえで、五井が繰り返し述べる言説をもとに筆者は、論点を二つ設定した。すなわち、論点①「『靈界』の構造と性質、論点②「守護靈、守護神」思想、である。この二つの論点を筆者が立てた理由を簡単に述べておこう。

まず、一般的な事実として、人(教祖)が違えば述べる内容(教説)も異なるものである。同じ様に、五井の「靈界」思想

と他教団のそれを比較するとき、教祖が違えば「靈界」について述べる内容も細部にいたっては様々であつた。だから、各団体において、こまかく論点を抽出すると、話が拡散し思想の幹が見えにくくなつていた。五井の言説のうち「自然靈」への言及なども論点として当初あげて、比較検討を試みたものの、本稿で挙げた教団すべてにおいて詳しく述べられている教説ではなかつた。そこで、各団体の「靈界」思想において不可欠となつている幹に焦点をあてて論ずる、という方針を筆者が立てたわけである。それが、前掲の二つの論点だつた。

なお、「靈界」の構造・性質に関する言説は、客観的に比較しやすい。また、「守護靈、守護神」思想は、五井の宗教思想の根幹をしめる重要な項目であり、本稿において外せない論点であつた。以上が二つの論点を立てた理由であり、「靈界」および「守護靈、守護神」を強調する白光真宏会の「靈界」思想成立にいたるプロセスを考察するうえで鍵になると筆者が考えたからである。そして、五井の「靈界」思想完成にいたるまでの期間のうち、どの時点で、誰の、どのような著作から影響を受けたのかを特定するねらいがあつた。五井の言説と接触した他団体の言説を比較し、明らかでない一致が見られるならば「影響有り」と推し量ることが可能となる。五井の「靈界」思想にとつ

て重要な論点との一致・不一致を見きわめることは必要であり、異なる人物間で教説がびつたりと一致するならば、五井が受けた思想的影響と述べることができよう。言説の一致度から、思想的影響の確かさが予測できる。ここが明らかになれば、五井の「靈界」思想の形成過程が解明できる、といえるのである。

以下、二つの論点につき、五井の言説を確認しよう。尚、引用文の揭示は、割愛する。

はじめに、「論点①」にかんして、五井が最初に刊行した書籍『神と人間』において、五井は、「靈界・幽界・肉体界」といった世界観や、「波動」によって出来た「靈体・幽体・肉体」という体に言及し、肉体の波動がもつとも粗い等と述べている。「一三一—四頁参照」。そして、『宗教問答』で五井は、死後、その人の習慣性となっている「想い」「想念」にしたがって「幽界、靈界、神界」といった世界で生活する、同種類の「想念」の人が集まる、と「死後の生活」について語った（四五—四六頁参照）。

さらに、前出『宗教問答』の続編である『続宗教問答』において五井は、「幽界」下部は「肉体界」と同じような「想念の世界」であり、例えば怒るとたちまち火炎が立ち昇るように、いわば、「想念」によって世界がつくられ、「想念」がそのまま

形と現れる、と述べた（一七九頁参照）。

また、同会の初期にあたる一九五四年から一九五八年にかけての講話を収めた『五井昌久講話集』の第二巻「素直な心」で五井は、人間とはあたかも重ね着しているように「肉体・幽体・靈体・本体」が重なり合った状態であり、それ（人間）は「肉体界・幽界・靈界・神界」のいずれの世界にも存在し得るのだという（四三—四四頁参照）。そして、前掲『続宗教問答』では、「死後、個性が存続するかどうか」について、五井は、人間の個性は死後も失われることはない、という（一七七一—一七八頁参照）。死んでのち、長期の年月を経ても各人（靈魂）の個性は消滅しない、というのが五井の主張である。

次に、「論点②」にかんして、五井は「守護霊、守護神」の存在をセットで強調する。自身が提唱し、広く唱えることをすすめた『世界平和の祈り』に「守護霊、守護神」の文言が記されていることからその位置付けの重さがうかがえよう。五井は主著『神と人間』において、「守護霊、守護神」に言及した。通常、彼は「守護霊」と言うが、本書では詳細に「正・副守護霊」の役割について説明している。「正守護霊」は一人の人間に専属で主運を指導し、「副守護霊」はおおむね仕事について指導する、と「正・副守護霊」の分担領域を記した。そして、

これら「守護霊」の上にあつて力を添えている存在が「守護神」であるとした〔二二頁参照〕。

さらに、『五井昌久全集1 講演編^①』の中に収録された一九七〇年一月四日の講演で五井は、「正守護霊」（一人）は運命を司り、「副守護霊」（最低二人）は職業・天分・生きる方法を教えてくれる、「守護神」は「神界」に属し「守護霊」は「霊界」に属す、と述べている〔三四頁参照〕。

また、前掲『五井昌久講話集』の第三卷『光明の生活者』において、五井は、「守護霊」とは祖先であり、魂の親、その上にある「守護神」は、魂の親の親、と語った〔一一〇—一一一頁参照〕。五井は一九四九年六月、神我^{しんが}一体^{いったい}を経験して覚者となった、とされ、信奉者たちにたいし、自身の体験として「守護霊、守護神」の存在を語っている。前掲『素直な心』に収録されている、一九五七年八月一日の講話で五井は、じぶんたちの宗教を「守護神宗教」と言った。五井は、「守護神」によって救われる、「守護神、守護霊、分霊（人間）」が三位一体^{さんいったい}となって「地上天国」を創るのだ、と説いた〔八二—八三頁、八九頁参照〕。

さて、ここで、これまで見てきたことの小括をしておきたい。五井は、論点①「霊界の構造と性質」において、「神界、霊界、

幽界、肉体界」の四つの界と「本体、霊体、幽体、肉体」の四つの媒体について述べ、それぞれが対応関係にあるものである、とした。五井のいう「直霊」は「本体」と通ずるものであり、人間は「神の子」「神性」を宿す存在^{ぞんざん}と五井が説くゆえんである。また、四媒体をたとえて、もつとも中心に「本体」、順次「霊体」、「幽体」、「肉体」という上着をつけている状態であり、死とはもつとも外の「波動」の粗い「肉体」を脱ぎすてることだと五井は説明した。そして、死後の世界は「想念の世界」と述べ、想念の善し悪しが死後に住む世界の環境を分けるという。さらに五井は、死後も媒体は個性を失うことはない、四つの媒体・四つの界は重なり合つて存在している、と説いた。

五井は、論点②「守護霊、守護神思想」において、霊位^{れいゐ}が「霊界」に位置する「守護霊」、霊位^{れいゐ}が「神界」に位置する「守護神」について述べた。「正守護霊」は一体で祖先の悟った霊であり主運を指導、「副守護霊」は数体で仕事関係の指導をしていると五井はいう。子孫である「肉体人間」一人のために「守護霊」がつき、その上位の「守護神」も一緒になって、愛念^{あいねん}をもつて常時見守っている、と五井は説いていた。

二、他の関係教団の「靈界」思想

本章では、五井が白光真宏会を立教するまでに接した教団(人物／書物)をとりあげ、五井の「靈界」思想形成に影響を与えた可能性のある教説がみられるかどうか確認する。この目的のもと、五井が読んでであろう各団体の著作を中心に、その「靈界」思想の内容を見ていく。これは、五井の「靈界」思想をふまえて、それとの比較・検討をするための作業である。

(一) 世界救世教

まずは、五井が最初に入信した世界救世教の教祖・岡田茂吉(一八八二—一九五五)の著作における「靈界」思想からみていこう。

はじめに、「論点①」について、『明日の医術』の第三篇によれば、岡田は、死後、大多数はまず「八衢」へ向かい、「靈界」の構成は「天国・八衢・地獄」各三段ずつ(合わせて九段)に分けられるという「九九—一〇〇頁参照」。そして、天国には「第一天国、第二天国、第三天国」がありそれぞれの天国に異なる主宰神がいる、また神界と仏界に分けられ仏界より神界のほうが

一段上位である、と述べた「一〇三—一〇五頁参照」。なお、岡田の「靈界」区分法および各界の呼称、神界と仏界との区別など、五井の言説には見られないものである。

岡田は、さらに詳細に、「靈界」の階層が合計一八〇段(一八一段とも)と具体的な数を示し、それを「靈層界」と名付けた。そして「天国」には、病貧争の対語である「健富和」が流通しているという「『明日の医術』第三篇、二一〇—二一五頁参照」。

「靈界」の性質については、前掲『明日の医術』・「天国の礎宗教下」によると、「靈界」とは意志想念の世界であり、意志(思うこと)によって望む所に移動できると岡田は述べ、さらに「靈」は伸縮自在、想念通りの面貌になる、といった特徴をあげている「『明日の医術』第三篇、九五—九七頁、『天国の礎 宗教下』、二六九頁参照」。

次に、「論点②」にかんして、岡田は、「本守護神、正守護神、副守護神」といい、「本守護神」とは神から受命された「靈魂」、「正守護神」は祖先の「靈」で人間を常に守護しているもの、「副守護神」は「動物靈」が憑依したものと説明した。さらに、「本守護神」は絶対善性・良心であり、「副守護神」は絶対悪・邪念であると述べた「『明日の医術』第三篇、一五九—一六二

頁参照」。

五井は終戦後まもなくの頃から岡田の弟子のところへ通い、前記『明日の医術』以外の岡田の著作も読んだが、岡田の「霊界の話」には共鳴しなかったようである。岡田の弟子から二〇〇頁くらいの「霊」にかんする本を渡されて読んだ五井の感想は、「(略)何か低俗な創作を読んだ後のように、後めたいような、くすぐったいような、何んともまともでない非芸術的な気持がして、(略)」「天と地をつなぐ者」、二六頁」というものだった。岡田の「霊界」思想は、五井の「霊界」思想の形成にはさほど大きな影響を与え得なかったといえるだろう。

(二) 生長の家

次に、五井が熱心に信奉した生長の家の教祖・谷口雅春(一八九三—一九八五)の「霊界」思想を見ることにしよう。

まず「論点①」については、『霊供養入門』¹⁴⁾に、その考えが記されている。これは谷口晩年の見解というよりは、大正末期から昭和の初期にかけて、浅野和三郎とともにスピリチュアリズムの研究にかかわっていた経緯を考慮するなら、当初から浅野が唱えたようなスピリチュアリズムや霊智学¹⁵⁾の思想を共有していたといえる。谷口は「本体、霊体、幽体、エーテル体、肉

体」の五つの体があるといい、五井が述べた四媒体に「エーテル体」を加えている。その振動数の差異で各々の体を分けている[二五六—二五九頁参照]。

さらに、谷口の『人生を支配する先祖供養』¹⁶⁾では、谷口は、「幽界、霊界」に言及し、それらの界の上位に「実相」¹⁷⁾の世界がある、と説いている。谷口の場合、洋書をふくむ「色々の霊界通信」「心靈学」を根拠として発言している[一四一—一四二頁参照]。

つづいて「論点②」にかんして、谷口は、地上の肉体人間の一生涯を護る存在は祖先の靈魂で、「正守護神」と呼んでいる。また、仕事により協働するために来るのが「副守護神(副守護霊)」だといっている[『霊供養入門』、二六三—二六四頁参照]。しかし、谷口の場合は、五井の説明とは異なり、「守護神」も「守護霊」も同列に述べてよい、と言っている[『人生を支配する先祖供養』、一四八頁参照]。

(三) 日本心靈科学協会、心靈科学研究会

次に、戦後まもなく五井が生長の家と重複して所属することになった日本心靈科学協会に関連し、浅野の思想を受け継いだ脇長生と五井との接点について、みてみよう。

同会で機関誌の編集をしていた脇長生は、講話テープ¹⁶の中で次のように述べている。当日、この講話会に同席していた人によつて、講話日を特定することができた。

（略）千葉県あたりの、どっか〔市川市〕にある新興宗教〔白光真宏会〕をよく言う。なんか、五とか、六とか言う、数字が出ておる〔五井のこと〕。あの教祖〔五井昌久〕は、うち〔心霊科学研究会〕の会員であつたんだから。私〔脇長生〕にどれくらい質問したか。ありゃあ〔五井は〕、要するに、大本教の事に興味を持ちつつ、とうとう、「生長の家」にも入つた。だから、うち〔心霊科学研究会〕の本で、随分、心霊科学的な知識は持つてる。（略）〔脇の講話テープ、一九七五年一月三〇日〕

この発言から、五井が脇と接触し色々な質問をしていたというところ、心霊科学研究会刊行の本を五井が読んでいたことがわかる。

また、一九七二年以降の脇の講話テープで、五井について次のように述べていた。

死んだら（略）死んだ時の心持ちから段々、段々、向上して幽界から霊界、霊界から神界に行くんだから、これを考えてほしい。（略）何か千葉県にあれ何か、五み〔五井〕かなあ、何か、五か六か知らないが、そういう数字がついてる方がある。あしこ〔白光真宏会〕では、やっぱり霊界通信、霊界通信って言ってる。（略）で、いい事を言っていると調べてみたら、我々〔心霊科学研究会〕が霊界通信だと言つて翻訳したり、言つたりしてるものをうまく抜き書きしてるんです。そんな事ばかりやってるですよ。（略）〔脇の講話テープ、一九七二年以降〕

脇の言い分では、五井の言っていることは心霊科学研究会で言っていることの抜き書きだと批判的に語っている。では、実際、互いの言説は、抜き書きと述べるほど全く同じなのか、順次みていきたい。

自叙伝によると、五井は「心霊科学協会〔日本心霊科学協会〕」が開催する「物理現象実験会〔物理現象をおこすとされる「霊媒」による実験会〕」に出席していたという『天と地をつなぐ者』、八九頁参照。協会の会員になっていたならば、同会の機関誌に目を通すことはあるだろう。

日本心霊科学協会では、一九四七年二月より機関誌『心霊研究』を刊行し、編集を担当していたのが脇だった。⁽¹⁷⁾ なお、本節においても引用文の揭示は一部、割愛する。

脇は「論点①」にかんして、英国のスピリチュアリスト、アーサー・フィンドレイ（一八八三—一九六四）の言説を参照し、「霊界」は振動の世界であり、「霊界」の環境は善と悪の心次第で定まる、といった説明を記している。『心霊研究』一九四七年二月号、一二頁参照。また、脇は一九四七年二月、新宿駅ビルで「質疑応答の会」を催しており、その時の記録が『心霊と人生』誌の付録小冊子となった。ここでは、私たちは「地上界」「幽界」「霊界」「神界」と順に向上していくというふうで、これら各界は同時存在にあるのだと述べた「小冊子『靈魂の働きの正しい解明』、三八頁、七五頁参照」。

次に「論点②」にかんして脇は、「守護霊」とはその人の祖先霊の一人であり、「支配霊」とは「守護霊」の統制下、特殊の任務を担当して「守護霊」を助ける存在であると述べている。『心霊研究』一九四七年三月号、四頁参照。ただし、脇は「正しい健康・平和・繁栄への道」⁽¹⁸⁾にて、「守護霊」にたいする人間の態度として他力的な気持をもつのは間違いであり、「守護霊」頼みでなく、まず自力で努力すべきと説いた「『正しい健康・

平和・繁栄への道』、一九三頁、小冊子『靈魂の働きの正しい解明』、九〇頁参照」。

さて、ここで、日本のスピリチュアリズム（「神霊主義」）の「生みの親」といえる浅野和二郎の考え方を見ておきたい。脇は、浅野のスピリチュアリズムの後継者であることを自任していたので、浅野の本の内容と同様に語ることが多かった。脇が依拠した浅野の『神霊主義』⁽¹⁹⁾を見ると、五井の「霊界」思想の論点①「霊界の構造と性質」、論点②「守護霊、守護神思想」全般にわたり、およそ言及していることがわかる。

浅野は、人間を「肉体、幽体、霊体、本体」の四つの機関に分け、これら四つの体は浸透的に互いに重なりあっている、とした。また、「界」を分類して、「物質界、幽界、霊界、神界」（「四大界」と記している）『神霊主義』、九一—一〇頁、一五頁参照。さらに、浅野は同書において、「近代心霊研究の結果から帰納し得べき条項」（一九七頁）として、一五の項目を書きつらねた。挙げられた項目のうち、五井の「霊界」思想との関連から、いくつかの項を揭示すると次のとおりである。

(四) 各自の個性は死後に存続する

(六) 死後の世界は内面の差別界である

(七) 各自の背後には守護靈がある

(八) 守護靈と本人とは不離の関係を有つ「一六六一—一六七頁、一七〇—一七三頁、一七七頁参照」

同書に書かれた浅野の言説は、五井のそれと同様であった。

そうして、浅野が起こした心霊科学研究会の教説を学んだ五井は、一九四八年あるいは一九四九年に、「神霊現象の会」が行われるという発足したばかりの千鳥会に入会した。⁽²²⁾千鳥会の発足(結成)月日には諸説あるが一九四八年ということでは確かである。⁽²³⁾日本心霊科学協会と千鳥会は、同じ「霊媒」(萩原真(一九一〇—一九八二))をもちいた「実験」をしていたことから、同様の会と受け止める人たちがいたようである。⁽²⁴⁾しかし、五井は千鳥会をとおして、日本心霊科学協会では得られなかったものを手に入れたいと考えていた。自叙伝によれば、

(略) 心霊科学協会の物理現象実験会に出席して(略) それだけの実験では何度見ても、霊界幽界があり、あの世で人間は生きつづける、と云う認識を得るだけで、神の実体に分れる事は出来ない。もつと高度な神霊の出現するところを識りたい、と思っていた。「天と地をつなぐ者」、

八九頁」

と述懐し、五井がその後、千鳥会入会にいたる動機をかいま見ることができると述懐している。

ここで、五井の千鳥会入会の動機に関連し、なぜ彼はもつと高度な神霊にふれたいと考えたのか等、当時の五井のおもいについて自叙伝を参考にして、次にまとめておこう。

その頃の五井は、日本心霊科学協会に入会後も引き続き、生長の家地方講師として活動していた。しかし、当時の五井は生長の家では「予言能力、予知能力」といった神秘力が無いと感じていたという。五井は、生長の家信徒の相談にたいする指導において言葉で長々と説教するものの信徒は満足し得ないために、どこかの行者や霊媒のところへ相談に行くようなことがあつたと述べている。彼は、生長の家理論だけの指導に行き詰まり、具体的相談に対処できない辛さ、切なさを感じていたがゆえに、人を救うための超人的な力がほしい、と願った。その点、千鳥会は「交霊会」において「神霊」との交流をおこなう会とされていたから、千鳥会入会をとおして五井はどこからか自分にプラスする力が得られることを期待していたわけである。⁽²⁵⁾

一般に、萩原霊媒を用いた場合をのぞいて、日本心靈科学協会の「実験会」において出てくる「靈魂」は、「人霊」が主であった。それにはたいし、千鳥会の「交霊会」では大峰仙人という「神霊」とされる存在がたびたび登場し、また同会は「神界」を中心におく活動といわれていた。だから、まさに五井の「神の実体」や「もつと高度な神霊」にふれたいという思いに合致していたのである⁽²⁶⁾。

四 千鳥会

五井が入会した千鳥会は、前出の「霊媒」萩原真と医師・塩谷信男⁽²⁷⁾（一九〇二—二〇〇八）によって発足し、会報⁽²⁸⁾では主に塩谷が教理面の解説を行っていた。

まず、「論点①」にかんして、塩谷は、「霊界」には多くの階層があつて、悟りの程度によつて住む世界が異なる、地獄に堕ちた霊でもいつかは向上して地獄を脱することが出来る、と述べている⁽²⁹⁾。「千鳥」一九四九年六月号、三頁参照。そして塩谷は、「現界、霊界、神界」という階層のこと、「絶対神」への帰一を目標とすること、を記した「同誌一九四九年一月号、二—三頁参照」。

また、萩原真の子で二代教え主・萩原真明⁽³⁰⁾は、「天命が見え

る⁽³¹⁾」の中で、人間は肉体、幽体、霊体などが重なつてきている、死後は修行を経て幽界から霊界へと向上していく、と述べている⁽³²⁾。「二八—三〇頁参照」。そして、萩原真明監修の『梶さんの霊界通信⁽³³⁾』には、「梶神霊⁽³⁴⁾」からの通信として、初期の「交霊会」（一九四八—一九四九年）における語録が収録されている。同書によれば、上の階の「霊界」ではコミュニケーションが想念の伝達によつて行われる、神界に近づいた遠い先祖は次第に個性を失う、などと述べている⁽³⁵⁾。「二一〇—二二二頁参照」。「交霊会」における「梶神霊」の言葉とのことだが、この時期、五井は千鳥会の「交霊会」に行っていた可能性が高く⁽³⁶⁾、こうした言葉を聞く機会があつたかもしれない。

次の「論点②」は強調され、塩谷は、どんな人にも必ず守り主⁽³⁷⁾（守護霊）・守り神⁽³⁸⁾（守護神）がついて守っている、守り主を助けるみ魂杖⁽³⁹⁾（副守護霊）も何人か居る、という⁽⁴⁰⁾。「千鳥」一九四九年六月号、四—五頁参照。また、塩谷は、守り主の上には守り神も居る、守り主は守り神の命によつてそのみ魂杖⁽⁴¹⁾（人間）に天命を授けている、人間が天職（天命）を遂行するためには守り神・守り主・自分の三者が一体となつて働かねばならない、と述べた「同誌一九四九年九月号、一頁、三頁、五—六頁参照」。なお、同会では「守り主」は「守護霊」、「守り神」

は「守護神」、「み魂杖」は「副守護霊」の別名が当てられる。塩谷は、人間に「み魂末」の天命・天職遂行のために、「自分、守り主、守り神」が一体となって働くことを強調した。

三、他教団の「霊界」思想との比較

前述の団体のすべてに見られた論点①②について比較してみよう。

世界救世教・岡田のいう「霊界」構造は、「天国・八衢・地獄」に大別され、合計一八〇段（一八一一段）の階層、という。「神界」を「仏界」の上に位置付け、神道の神を天国の主宰神にすえるなど、五井の「霊界」構造論にはないものである。また、岡田の「正守護神」が五井のいう「守護霊」に近いだろうが、岡田の「副守護神」は後天的に憑依した「動物霊」に絶対悪の存在というから、五井の「副守護霊」とは性質が異なる。

次に、生長の家・谷口のいう「霊界」構造は「幽界、霊界」といい、「実相」の世界も説く。谷口は原著において近代スピリチュアリズムの思想を紹介的に説明し、基本的にその思想を受け容れているが、「実相」世界など、自らの用語で語り直している。「守護霊、守護神」思想については、谷口の「正守護神」

が五井の「正守護霊」、谷口の「副守護神」が五井の「副守護霊」に近い面がある。

日本心霊科学協会／心霊科学研究会・脇の語るところによれば、五井は同会刊行の本を抜き書きしている、とのことだった。同会のいう「霊界」構造では、「神界、霊界、幽界」といい、五井も同様である。また、「守護霊、守護神」思想にかんじて、脇は「守護霊、支配霊」と記し、これらは五井の「守護霊、副守護霊」に相当する。いっぽう脇は「守護霊」に他力的な気持ちをもつのは間違いと述べたが、五井は他力的に捉えた。

千鳥会における「霊界」構造の説明は、塩谷が日本心霊科学協会の会員となっていたことから推察できるように、「神界、霊界、幽界」という浅野の説をほぼ継承していた。ただし、同会の「神示」にもとづき、「神界」など上級の界に行くほどに個性が薄くなってくると説いた。「守護霊、守護神」思想については、千鳥会の「守り主、守り神」が五井の「守護霊、守護神」に該当する。千鳥会では、人間が「天命」を果たしていくために「守り主と守り神と自分」とが一体となる必要を説く。これは、五井の「祈り」の言葉と通ずるようにみえる。

ここで、これまで比較してきた各団体の「霊界」思想について、その結果を約してまとめておきたい。論点①の「霊界構造

と性質」については、「霊界」の呼称に若干違いがみられた教団（世界救世教、生長の家）はあったが、どの団体においても「霊界」が非常に多くの層に分かれ、亡くなった人間の「靈魂」はその心境の高下により「界」の所屬が決まる、「霊界」は想念の世界である、との言説を有していた。これは五井の思想と共通する。また論点②の「守護霊、守護神思想」については、呼称は若干違っても（例…世界救世教・生長の家の「正守護神」、その働きの内実から判断すると、どの団体にあっても五井の言う「正守護霊」に相当する存在を説いていた。尚、「守護霊」とその上に位置づけられる「守護神」が一体となって人間を守護するとの教説は、本稿で検討した団体の中では千鳥会と白光真宏会にのみ見られるものである。これは、五井が千鳥会から「守護霊、守護神」体制という「霊界」思想の影響を受けたことを示しているだろう。

各団体いずれもスピリチュアリズムの思想をベースにしているため、共通の「心霊」知識が随所に語られている。ただし、「心霊」知識の枠をこえた概念として、「守護霊」の上の存在・「守護神」を、千鳥会と白光真宏会の五井は語った。この点は、思想において、千鳥会と白光真宏会がスピリチュアリズムから一歩踏み出したところといえよう。

おわりに―考察

最後に、筆者の考察を述べたい。五井の「霊界」構造と「守護霊、守護神」思想を見る時、世界救世教・岡田からの影響はほとんど見られなかった。生長の家・谷口の場合、浅野同様、近代スピリチュアリズムに坎する書籍の翻訳を行い、浅野が発刊した心霊雑誌『心霊界』（一九二四年創刊）を編集・寄稿するなどしていたので、「心霊」関係の知識が豊富にあった。浅野の説もふまえながら、自らの言葉で「霊界」思想を語り、谷口は、「霊界」構造に坎しては浅野に近い多重構造の説明をしている。しかし、究極を「実相」世界と表現したり、四魂（荒魂、和魂、幸魂、奇魂）と関連づけて説いたりした。浅野も四魂と各界の対応説を述べているが、五井はそうした説を取り込もうとはしなかった。谷口の書籍は海外の「心霊」情報を知るうえで参考になっただろうが、五井の「霊界」思想を決定づけるまでには至らなかったと筆者はみている。それは、生長の家に満足しきれず生長の家地方講師でありながら千鳥会の「神霊現象実験会」に通っていたことからもうかがえる。五井は自叙伝において「生長の家では、予言能力、予知能力が無い。

(略)人を救う為に超人的力が欲しい」「天と地をつなぐ者」、八九一九〇頁」と述べており、当時は体験的に「神霊」のリアリティを感じたいと望んでいたようである。また、谷口は「守護神、守護霊」を同列に説いたのに対し、五井は上下に両者を分けた。

日本心霊科学協会、心霊科学研究会のうち、特に浅野の著作に書かれた言説は、五井の「霊界」思想において、知識面で幹となっている。五井の論点は、浅野の本の中でおおよそ言いつくされていた。「浅野の視点からまとめられたスピリチュアリズムの本」の内容を五井の「霊界」思想に「心霊知識」としてとり入れた、といえるだろう。ただし、同研究会においても「守護霊」の説明はあるが、五井の言う「守護神」は語っていない。ゆえに、五井の言説が浅野本の「抜き書き」のみとは言えない。ちなみに、のちに千鳥会をたちあげる萩原は、一九四七年頃、「霊媒」として日本心霊科学協会がたびたび「物理的心霊現象実験」を行い、そこで脇は「審神者」の役をつとめていた。立会者の数は数十名の小規模なものである。五井と脇が出会った時期は不明だが、この頃同協会の「実験」に出席していた五井が、その場で脇や萩原と面識を得たことは考えられよう。

千鳥会の「霊界」構造論は、「心霊科学」的であり、五井と

似た考え方である。しかし「死後個性」のありようについては見解の違いがあった。また、「守護霊、守護神」思想にかんして、千鳥会は「守り主、守り神」の重要性を強調する。内容は「守護霊、守護神」と同様であり、「守り主、守り神」は一緒になって人間をまもっている、という。この考え方は、五井の「守護霊、守護神」体制のまもり、と軌を一にする。

千鳥会入会の際、それまで五井のなかになかった「守護神」というピースが彼の「体験」を経て、五井独自のリアリティをもった存在となっていく。彼の「霊界」思想の形成にとって重要な点なので、その「守護霊、守護神」思想の形成過程、同思想完成・成立への道筋につき、以下、もうすこし掘り下げて言及しておきたい。

◆「守護霊、守護神」思想完成への道筋

五井の自叙伝によれば、彼の「守護神」体験は、千鳥会入会を契機に生起することとなった。五井は千鳥会の「交霊会」に参加した折、萩原霊媒を介して「大峰神霊」らの言葉に接している。同「交霊会」から帰宅後、五井はみずから霊的交流を試み、「霊魂」の声が聞こえたり、「自動書記」「霊」の作用により文字等を書くこと、とされる「」したりするようになったという。その後の千鳥会の「交霊会」で五井は大峰仙人から「自

動書記を大いにやれ」と薦められている。そして、五井は靈的現象で事務がとれなくなったため勤めていた中央労働学園を退職、一九四九年春頃には「靈能的な予知力、予言力が出て来ていた」と五井は自らの状況を述べた。その後数カ月の「靈修行」を経て、「神我一体」という神秘体験を得た、とされる。

五井はそのときの「体験」について、自叙伝において次のように語っている。

私が現在迄様々な宗教を通して来て、最後に守護神の指導による靈的直接体験の後、(略)これは私の背後に誕生以前より、私を守護し指導していた守護神、守護靈が厳然として控えていた事を、すべての修業の済んだ直後に、はっきり識ったからである。(略)『神は愛である』と云う神は法則の神ではなく、守護神としての神である。宇宙に満ち充ちている生命と云う神ではなく、人間と等しき愛念をもつ神である。(略)肉親的愛情の所有者である神が必要なのである。

私はいこうした神を、守護神として改めて民衆に発表した。そしてその下に真実肉親として系図を見れば判る様な祖先を守護靈としてはっきり認識させる様に教えている。今迄

何んとなく漠然としていた守護神、守護靈を、各自が自分のものとして温い思いでつかみ得るように示したのである。『天と地をつなぐ者』、一四二—一四八頁]

一九四九年六月、右のような「体験」を得て、「守護靈、守護神」が五井にとってリアルなものとなった。特に、「守護神」について、「大生命」や「法則」といった漠たる存在ではない、と五井が述べた点に重要性がある。五井は「守護神」のなかに慈愛・愛念をみとめ、「守護神」とは遠い存在でなく身近にあって人間の苦悩に手をさしのべ救済してくれる存在である、とした。引用文における五井の主張の背景には、前述の数カ月におよぶ「靈修行」の過程で五井が身近に「守護神」からの内なる「声」を自覚していたことがあった。祖先の悟った霊「守護靈」は、他教団でも説かれていたけれど、肉親的愛情をもつ「神」が各人に「守護神」の名でついて常時はたらいとれていて、と述べた点に五井の「守護靈、守護神」思想の新しさがある。「守護神」を抽象的でない、困った時にすがり、助けを求めてつかんでよい「愛の神」と位置付けたところが、五井の「霊界」思想において重要なポイントといえるだろう。五井は、「守護靈、守護神」は愛をもって常に人間をまもってくれていると語り、

だからこそ「守護霊、守護神」への感謝の言葉を「祈り」のなかで唱えよ、と繰り返して強調しているわけである。こうした道筋、経緯を経て、五井の「守護霊、守護神」思想は完成した。

◆本稿の意義

あらためて、本稿の意義を確認し、強調しておきたい。

第一の意義は、五井昌久の「霊界」思想の形成において、複数の影響因子が考えられる中、テキストの比較検討をとおして、最も強い影響があったものを浅野和二郎の著作と説明したことにある。特に、脇長生の講話テープでの話を重要な証言とし、五井と浅野をつなぐ関係性の「線」が明確になった。「混淆型」の教団の場合、教理形成のプロセスが見えにくい。それを白光真宏会の五井を例に、部分的ながら解明したやり方は、他の教団教祖の思想形成の過程を探るうえでも参考になるのではないだろうか。

第二の意義は、五井の説く「守護霊、守護神」体制において、特に「守護神」＝愛念をもった存在^①との五井独自のアイディアを本稿によって浮きぼりにしたことが挙げられよう。すなわち、五井の「霊界」思想において「守護神」の考え方に注目し、千鳥会との関係、五井自身が「霊修行」を経てつかんだ独自の「守護霊、守護神」観の形成過程を明らかにしたことは意義あ

ることといえよう。

今後は、五井の「霊界」思想に限らず、例えば「祈りによる平和運動」にかんする思想形成についても考究していきたい。

註

- (1) 一九五五年にその前身「五井先生講演会」（一九五一年結成）を宗教法人化、翌一九五六年に名称を「白光真宏会」と変更した。本部は千葉県市川市にあったが現在は静岡県富士宮市に移転。信者数は数万人。創始者・五井昌久の後継者は、現会長・西園寺真美（一九四一—）。「井上順孝他編『新宗教教団・人物事典』弘文堂、一九九六年、二五八—二五九頁、等参照。
- (2) 対馬路人「世界観と救済観」（井上他編『新宗教事典』弘文堂、一九九〇年）、窪田高明「『霊界物語』における台湾」（『神田外語大学日本研究所紀要』七号、二〇一五年六月）、渡部俊彦「心霊研究とピリチュアリズムの発展史概観」（『Journal of International Society of Life Information Science』二五巻一号、二〇〇七年三月）、津城寛文「マイヤーズ問題——近代スピリチュアリズムと心霊研究の間で」（『駒澤大学佛教学部論集』三八号、二〇〇七年一〇月）、田中初夫「『顕界と幽界——神道に於ける神の分類とその世界』（『東京家政学院大学紀要』五号、一九六五年）、菅野倫太郎「『霊能真柱』の世界観と宗教的安心」（『皇学館論叢』二六一号、二〇一一年八月）、遠藤潤「平田篤胤の他界論再考——『霊能真柱』を中心に」（『宗教研究』六九巻二輯、一九九五年九月）、等。
- (3) 五井昌久「天と地をつなぐ者」宗教法人五井先生講演会、一九五五年。

- (4) 五井昌久『神と人間―安心立命への道標』五井先生讃仰会、一九五三年。
- (5) 五井昌久『宗教問答』白光真宏会出版局、一九七八年(初版は一九五九年)。
- (6) 五井昌久『統宗教問答』白光真宏会出版本部、一九九七年(初版は一九七〇年)。
- (7) 『五井昌久講話集』は全五巻刊行されているが本稿では1・2・3の三巻を参照。五井昌久『生命光り輝け 五井昌久講話集1』白光真宏会出版局、一九九二年(九版)。五井昌久『素直な心 五井昌久講話集2』白光真宏会出版局、一九八四年(五版)。五井昌久『光明の生活者 五井昌久講話集3』白光真宏会出版局、一九八五年(三版)。
- (8) 五井提唱の『世界平和の祈り』は次の通り。「世界人類が平和でありますように／日本が平和でありますように／私達の天命が完うされましますように／守護霊様ありがとうございます」(『白光』二〇一七年二月号、表二頁)。
- (9) 五井昌久『五井昌久全集 第一巻(講演篇)』白光真宏会出版局、一九八〇年。
- (10) 岡田茂吉『明日の医療』(第一篇・第二篇・第三篇) 志保澤武、一九四三年。
- (11) 世界救世教本部編『教修要綱』世界救世教出版部、一九五二年、四八頁には「(略)更に最奥天国の一段が加わり合計百八十一の段階の層になっています故、(略)」とある。
- (12) 世界救世教教典編纂委員会編『天国の礎 宗教下』世界救世教出版部、一九九六年(第一版第三刷)(第一刷は一九九三年)。
- (13) 谷口雅春『霊供養入門―運命は改善できる―』世界聖典普及協会、一九八三年。
- (14) 浅野和二郎は、一九三三年に「心霊科学研究会」を發会した。同会の機関誌は「心霊研究」↓「心霊界」↓「心霊と人生」と名称を変遷。谷口は浅野生存時、上記誌上に幾度も寄稿。浅野没後の後継団体に、一九四六年設立の「日本心霊科学協会」と戦後一九四九年に再始動した「心霊科学研究会」がある。日本心霊科学協会は月刊「心霊研究」を現在も刊行中。心霊科学研究会の月刊「心霊と人生」は現在刊行されていない。
- (15) 谷口雅春『人生を支配する先祖供養』日本教文社、一九七四年六月(四版)。
- (16) 心霊科学研究会の浅野和二郎や脇長生の著作から学ぶ勉強会が東京都内において行われており、筆者も何度か参加した。本資料(テープ起こし)は同勉強会にて龍雅会の中野雅博代表より提供してもらった。脇の講話の音声も筆者も聞いて確認した。
- (17) 日本心霊科学協会「本会役員」をみると、常任理事に脇長男(脇長生)の名が確認出来る。戦後に刊行の機関誌『心霊研究』(第一号の編集長)は脇長男となっている。同誌の表四頁には「心霊科学研究会出版書籍目録」として浅野の著訳書、『神霊主義』『死後の世界』『心霊学より日本神道を観る』などが広告的に紹介されている。「心霊研究」一九四七年二月号、表三頁、表四頁参照。
- (18) 『心霊と人生』誌は、浅野和二郎が創刊した心霊雑誌。浅野の死去後は脇が引き継いで刊行した。一九四四年一月号を最後に休刊していたが、一九四九年四月に復刊。
- (19) 小冊子『座談会記録 靈魂の働き』の正しい解明(解説) 脇長生「心霊科学研究会」一九六七年一月三日。
- (20) 脇長生口述『靈魂の働きによる正しい健康・平和・繁栄への道』日本スピリチュアリスト協会、一九九八年(二刷)。
- (21) 浅野和二郎『神霊主義―事実と理論』嵩山房、一九三四年。脇は、本書の改題版『心霊研究とその帰趨』(心霊科学研究会、一九五〇年)

- を会員に読むよう薦めた。
- (22) 五井前掲『天と地をつなぐ者』、八八―八九頁参照。
- (23) 千鳥会は一九四八年七月四日に結成し、翌一九四九年八月に宗教法人となったという『千鳥』一九四九年二月号、二頁参照。尚、千鳥会の結成時期は、萩原真の記述では「一九四八年節分」「機関紙『真報』三七号、真の道出版部、一九六〇年二月一日、一頁参照」とある。萩原真自伝の「略年譜」には「一九四八年六月に結成〔真の道出版部編『真を求めて 萩原真自伝』真の道、一九九一年、巻末頁参照〕と記されている。
- (24) 日本心霊科学協会と千鳥会は相互に情報を共有・提供し合っていた時期があり、『心霊研究』誌に萩原真編『靈界物語』の広告と共に千鳥会の紹介も行っている『心霊研究』一九四九年二月号、表三頁参照。
- (25) 五井前掲『天と地をつなぐ者』、八九―九一頁参照。
- (26) 同書、九三頁、等参照。
- (27) 塩谷は、東京大学医学部卒、医学博士。『心霊研究』誌一九四八年二月号によれば、この頃、塩谷は日本心霊科学協会の「普通賛助会員」になった『心霊研究』一九四八年二月号、一六頁、表四頁参照。
- (28) 千鳥会の会報『千鳥』は、一九四八年六月に第一号を刊行した。
- (29) 萩原真明「天命が見える」旺史社、一九九四年。
- (30) 萩原真明監修『梶さんの靈界通信』旺史社、一九九六年。
- (31) 「梶神靈」とは、萩原真の親友で、梶光之のこと。一九三四年、梶は旧満州で他界したが、二年後の一九三六年から萩原真のもとに「靈界」から通信してきたという。梶は、修行を積み、神格を得たとされている。『梶さんの靈界通信』、四四―四五頁参照。
- (32) 五井は自叙伝の中で「(略) C会(千鳥会)の交霊会には何処へでも出掛けていった。『天と地をつなぐ者』、九七頁」と記している。千鳥会主催の「交霊会」は一九四八年四月には行われていた『千鳥』
- 一九四八年六月号、二頁参照。
- (33) 大正末から昭和初期、谷口は『心霊と人生』誌にも寄稿している。機関誌『心霊研究』一九四七年二月号―一九四九年一月号、参照。尚、同誌への脇の寄稿は一九四九年一月号で終わっている。
- (34) 五井前掲『天と地をつなぐ者』、八八―一〇三頁、一〇九―一一七頁、一三〇―一四〇頁、等参照。
- (35) 対馬路人他「新宗教における生命主義的救済観」(『思想』六六五号、一九七九年一月)によれば、生長の家など一教団を研究した結果、新宗教の教えの中核には根源的生命という概念があるという。しかし、これは茫漠とした概念であり、五井の言うような人間の情愛の要素は強調されていない。
- (36)